

アフリカからアジアへ移動する 「新興」の交易ディアスポラ ——広州・ドバイにおけるムリッド商人の活動事例から

榎並 ゆかり 同志社大学大学院博士後期課程

キーワード：交易ディアスポラ，ムリッド，ビジネスの仲介者

中国が「世界の工場」と言われるようになって久しい。2000年以降，世界中から中国商品を求める交易ディアスポラが広州に移動したが，その中に本稿で取り上げる西アフリカのセネガル出身者も含まれていた。西アフリカでは古い時代からサハラ交易で活躍してきたソニンケ商人が有名であるが，本稿で取り上げるのは19世紀後半にセネガルで結成されたイスラーム神秘主義教団の流れを汲むムリッド共同体である。フランスから独立後のセネガル社会で頭角を現し，欧米・アジアの商業都市に次々とディアスポラ・コミュニティを形成しながら交易ネットワークを拡大したことにより，セネガル本国でも存在感を増しつつある。

ソニンケのような従来の交易ディアスポラは交易商人としての古い歴史を持つ。それに対し，ムリッドは，もともとセネガル農村で落花生栽培に従事していた農民である。首都ダカールのインフォーマルな市場商人・運送業を経由し，欧州から北米・アジアへと新天地を求めて移動することにより，今や交易ディアスポラとして再定義されるべき存在となった。筆者は，ムリッド共同体を「新興」の交易ディアスポラと呼び，ソニンケを「古典的」ディアスポラと呼んで区別しようとしている。

トランスナショナルな交易ネットワークを拡大させるにあたり，交易ディアスポラとしての境界を維持するためには強い連帯意識が必要である。「新興」の交易ディアスポラであるムリッドの連帯意識は，どのように形成されたのであろうか。また，一方で移動先の多様性に適応するには，共同体の柔軟性も求められる。筆者は，中国の広州（Guangzhou）とアラブ首長国連邦のドバイ（Dubai）におけるダイラ（dahira：信徒組織）とエスニック・レストランに注目した質的調査^{*1}を行い，ムリッド共同体の連帯意識形成の場と男女の役割について検討した。ムリッド共同体が急激な拡大を見せている理由を信仰と交易という2つの切り口から明らかにしたい。

1 はじめに

広東省の省都である広州市（Guangzhou）は，古代から海上交易の中心地としてアラブ・ペルシア商人が来航しイスラーム文化を受容した地域である。唐の時代にムスリム商人が中東から来訪し広州に居を構え，彼らの居住地域は「蕃坊」と呼ばれた。中東出身の商人が多く居住しているのは，かつて「蕃坊」が存在した広州である（松本，2010）。21世紀の現在，広州の国際見本市には世界中から人

が集うが、その広州にアラブ商人が集まる一角がある。ムスリムにとって広州は歴史的にも入りやすい土壌があったからであろうか、広州には回族^{*2}が多数居住する。現在ではアラブ地区周辺にアフリカ出身者も集住しており、三元里地区はアフリカ人のエスニック・エンクレイヴ（ethnic enclave：飛び地）の様相を呈しており、「広州アフリカン・タウン」とも呼ばれている。

「広州アフリカン・タウン」に関し海外メディアが初めて報道したのは、ル・モンド誌^{*3}であった。記事の要約は以下の通りである。

アフリカン・タウンではイボ語（ナイジェリア）、ウォロフ語（セネガル）、リンガラ語（コンゴ）が、中国標準語と広東語に交じって聞こえる。1980年代に最初のアフリカ商人イギリス領香港に来訪、2001年9月に中国がWTOに加盟するとアフリカ商人たちは安い商品の産地へと直接買い付けに出向くようになった。以降、中国の政策転換によって、アフリカ人の入国が容易になり、アフリカでニーズの高い中国商品を買付けけるための移動が促進された。アフリカ商人は中国で順調に実績を伸ばしていたが、2008年の北京オリンピックの直前に中国政府はアフリカ人の現地でのビザ更新を停止したため、商用ビザの更新のためにはアフリカまで帰国しなければならない。したがって30日の観光ビザのためにマカオなどに出向く者、正規のビザを入手するために民間業者に委託して行政当局を買収する者もいるという。こうした状況で、合法的に滞在するためにアフリカ人と中国人との国際結婚は目に見えて増加してきた。

この記事は、広州のアフリカ人に注目が集まる契機となった。

記事にある「中国のアフリカ政策転換」とは、2000年10月に第1回中国・アフリカ協力フォーラム（FOCAC）^{*4}を開催して以降、中国がアフリカとの関係強化を図っていることを指している。中国はアフリカとの「共同发展」を掲げ、アフリカ諸国に対し対外援助やインフラ建設を中国企業が請け負う「対外請負プロジェクト」を行い、積極的に技術協力、投融資、人材育成を行っている。これにより、資源エネルギーの安定確保と国際社会における中国支持層を獲得している。中国とアフリカの貿易総額は、2000年は100億ドル余りであったが、2008年には1,000億ドルの舞台を超え、2011年は1,662億ドルに達した。中国はアフリカの最大貿易相手国となった（ジェトロ、2013）。

交通インフラ整備の点からみると、2008年にエミレーツ航空がセネガルの首都ダカール等アフリカ主要都市に就航したことがアフリカからアジアへの人の流れを促進させた理由の1つと言える。アフリカ諸国からドバイ経由で中国へ渡るルートが開拓され、欧州諸国を経由せず、商用ビザを取得しやすいドバイ経由による移動が可能となったからである。

広州に滞在するアフリカ人の規模については、2014年8月29日付の人民網^{*5}は以下のことを伝えている。広州大学広州発展研究院の「広州外国籍流動人口の管理現状分析および対策研究」は、地理・気候条件、ビジネスチャンス、都市のキャパシティなどの要因から広州はアフリカ系外国人が最も多く住むアジアの都市としている。また、第6回国勢調査によると、中国に常住する外国人は59万3832人で、うち広東省には全国最多の31万6138人が住んでいる。2010年、広州の各通関地から入国した外国人は延べ418万人、広州に一時滞在した外国人は延べ192万人、常住外国人は2万8000人にそれぞれ達し、国内各大都市のトップに立った。広州に現在滞在している外国籍流動人口のうち、アフリカ系外国人は全体の約2分の1を占めている。広州に住むアフリカ系外国人はすでに20万人あまりに達し、その多くは不法滞在者であるという。

こうした背景のもと、ニーズの高い中国商品をアフリカ商人自身により買い付ける動きが促進され、「中国のアフリカ人」を対象とする研究は急速に進み始めた。しかしながら、これらの先行研究^{*6}の多くは「アフリカ人」という文脈で語られ、個別のエスニック・グループが持つ故郷の背景を踏まえた研究はまだ少ない。他方、アフリカ研究の立場から見ると、国際移動・ディアスポラ研究の主流は欧米への移動を対象としており、ムリッドの中国・アジアへの移動に関する研究は皆無である。

筆者はセネガル農村研究を出発点に、対象者のトランスナショナルな移動と交易ネットワークに関心を持つようになり、現在、ムリッド共同体（英：Murid Islamic Community、仏：la Communauté Mouride）のトランスナショナル・ネットワークに関する研究を行っている。ムリッド（Mouride）とは、セネガルで近年急速に発展してきたイスラーム神秘主義教団を指し、その信徒のこともムリッドと呼ぶ。そこで、混乱を避けるため本稿では共同体を指す場合には「ムリッド共同体」、信徒個人を指す場合には「ムリッド」と表記することにする。

まず、ムリッド共同体がセネガルから各地に移動し拠点形成しながら発展している「新興の」交易ディアスポラであることを先行研究との比較から明らかにする。故郷から離散する交易ディアスポラが共同体を維持していくためには、移動先への同化を避け境界維持をはかる必要がある。そこで、次に移動先でいかに連帯意識を醸成していったのかを議論する。ムリッド共同体の連帯意識は、移動先での日常的な信仰実践と相互扶助の場としてのダイラ（信徒会、男性中心）を通してつくられ維持されると先行研究では指摘されている。しかし、果たしてそれだけであろうか。

筆者は、ムリッド共同体を分析するにあたり、彼らのネットワークを以下の2つに分類して検討したい。1つは聖地とダイラを連結する宗教共同体としてのネットワーク（以下、「宗教ネットワーク」とする）で、これは先行研究も指摘するように主軸として捉えている。加えて筆者は、交易ディアスポラとしてのネットワーク（以下、「交易ネットワーク」とする）もムリッド共同体の連帯と組織拡大に貢献していると考えている。それぞれのネットワークがつくられる場では誰がノード（結節点）の役割を果たしているのか、事例から検討したい。

本稿で検討する事例は、ムリッドの故郷であるセネガルの他、中国の広州（Guangzhou）とアラブ首長国連邦のドバイ（Dubai）での筆者の調査から得た質的データである。調査地として選定した広州は移動するムリッドにとって商品買付のための最終目的地であり、ドバイはアフリカとアジアの中継貿易基地である。調査対象者には、広州、ドバイの長期滞在者とともに、短期の移動を繰り返す買付商人も含めた。理由は、筆者の研究対象が「定住目的」の移動ではなく「トランスナショナル」な移動であるからである。すなわち、移動先に長期滞在する者と短期移動を繰り返す者は、どちらも交易ディアスポラ共同体の構築に重要な役割を果たすと考えるからである。

本稿により、筆者は、トランスナショナルな移動に関する研究の流れの中に、ムリッド共同体を「新興」の交易ディアスポラとして位置づけたい。中国で「アフリカ商人たち」という漠然とした存在として捉えられているムリッドを、その背景と実像を詳らかにすることによって、鮮やかな輪郭を持つ存在として捉え直したい。

2 なぜ「新興」の交易ディアスポラなのか

(1) 交易ディアスポラをめぐる議論

ここで、交易ディアスポラの定義とそれをめぐる議論について述べておく。

近年の国際移動論、移民研究、トランスナショナリズム研究の文脈においては、国民国家の枠組みを超える現象を理解するため、「ディアスポラ (Diaspora)」という用語を広義の概念として捉え直そうとする潮流がある。ロビン・コーエン (Robin Cohen) は、国際移動のパターンを労働移動、家族移動、頭脳流出、難民移動といったA国からB国への一方向の流れとしてみるだけでは、故郷と移動先の間の横断的・循環的な流れを適切に記述することができないと考え、ディアスポラという古い概念を復活させ新しい形態を理解する手段にしようとした。ディアスポラは、もともとギリシャ語に由来し、種を蒔くときのように分散させるという意味で、民族集団がもとの土地から離散することを指す。ディアスポラの古典的概念には、しばしばユダヤ人 (バビロン)、アフリカ人 (奴隷貿易) のような悲劇的な離散というイメージが付きまとう。ロビン・コーエンはユダヤ人のような本来の概念を「犠牲者ディアスポラ」とし、その他に新しい概念である労働・交易・帝国・文化ディアスポラを加えて5つに類型化した (Cohen, R., 1997=2001)。ロビン・コーエンの著作は多くの研究論文に引用される一方で批判もされ、後に新しい事例にも言及し、犠牲者・労働・帝国・交易・脱領土化ディアスポラに再類型化した (Cohen, R., 2008=2012)。

これに対し、ブルベイカー (Rogers Brubaker) は「ディアスポラのディアスポラ」が拡大していると批判しディアスポラの基準を①離散、②郷土志向、③境界の維持という3つに定義し直した。ブルベイカーは、最近のディアスポラ概念をめぐる議論では郷土志向を重視しない傾向があるが、境界の維持はディアスポラの説明には不可欠であり、多様な国家に居住 (離散) するディアスポラの成員を1つの「国家横断的共同体」へと結びつける連帯意識によって「共同体」として語ることができるとする。しかしながら、古典的なディアスポラはさて置き、新しいディアスポラが世代を越えて境界を維持できるかどうかはまだ不明であるとしている (Brubaker, 2005=2009)。

ロビン・コーエンによると、交易ディアスポラを最初に定義したのは、アブナー・コーエン (Abner Cohen) であるという (Cohen, R., 2008=2012: 173)。アブナー・コーエンは交易ディアスポラの定義について以下のように述べている。交易ディアスポラは社会的には相互依存しているが、空間的には分散している諸コミュニティの統一体である。しかしながら、空間的に分散しているため当然リスクが予想され、相互の信頼関係が必要となる。その信頼関係を倫理的凝集力といい、具体的には「家族・親族」「共通の通商文化」「共通の宗教」が結合のための紐帯を作り出す (Cohen, A., 2005: 266-81)。ロビン・コーエンもアブナー・コーエンのこの定義を引用して交易ディアスポラを説明した。典型的な事例としてレバノン商人、中国商人を取り上げ説明している。その他、ベネチア商人、インド商人の例にも言及している (Cohen, R., 2008=2012)。

では交易ディアスポラはいつから存在していたのか。カーティン (Philip Curtin) によれば、都市生活が開始された古い時代には既に「ごく一般的な組織形態」として存在していたという。ある社会から違う都市に移動した商人は、交換を開始するため移動先都市の言語、習慣、商習慣を学ぶことになる。この段階ですでに、移動先に定住する商人と往来する商人とがおり、最初は一人の移住から始まり、やがて交易網を形成する商業社会の関係のシステムすなわち交易ディアスポラとなった。やがて商人が相互的ネットワークを持ちながら異邦人の中で生活する現象があらゆる大陸で見られるようになった。交易ディアスポラは1740年から1860年の間に一旦姿を消し、それに代わって登場したのが通商関係を支配したヨーロッパの帝国であるという (Curtin, 1984=2002)。

カーティンが交易ディアスポラは消滅したという説を唱えているのに対し、ロビン・コーエンはイギリス東インド会社、オランダ東インド会社といった貿易会社は交易ディアスポラを伴う超国籍企業

の先駆的存在である、とする。すなわち交易ディアスポラはこの時期に消滅したわけではなく、植民地時代には帝国の「補助者」として、グローバル時代には「エスニック企業家」として、うまく形態を変えながら存在し続けてきたというのである。さらにロビン・コーエンは、国民国家の枠組を前提とした現代では理解されにくい特異な存在として扱われてきた交易ディアスポラが存在を、ディアスポラ自身にとっても故郷・定住先にとっても有益な社会的組織の永続的かつ革新的なモデルとして見ることができる、と提唱する (Cohen, R., 2008=2012)。

これまでの議論に沿い筆者の考えを整理しておきたい。筆者はロビン・コーエンのディアスポラ分類、ブルベイカーの境界性の維持および連帯意識に関する議論、アブナー・コーエンの倫理的凝集性に関する議論をふまえて、ムリッド共同体を交易ディアスポラの1つであるとしている。筆者は、ブルベイカーのいうディアスポラの「連帯意識」とアブナー・コーエンのいう「信頼関係」はほぼ同じものを指していると考えている。アブナー・コーエンはこの信頼関係を担保するのが倫理的凝集力すなわち「共通の宗教」等である、と指摘している。

本稿で事例として取り上げるムリッドは、セネガルのムリッド教団の聖地トゥーバ (Touba) を中心に世界各地にネットワークの拠点 (移民コミュニティ) を増やしつつある。移動先の各地で厳格に境界の維持に努めており、倫理的凝集力としてのムリッド信仰が共同体維持に貢献しているとされる。

交易ディアスポラが一旦消滅したのかという点に関しては、筆者はロビン・コーエンの立場をとる。その論拠は、後に述べるソニンケの存在である。

尚、Trading diaspora の日本語訳については、カーティンの著書 (Curtin, 1984) の翻訳版 (田村, 2002) によると「交易離散共同体」となっている。こちらの訳の方がムリッド共同体の実像がより明確に伝わるのではないかと考えたが、本稿では混乱を招かないよう広く受け入れられている日本語訳である「交易ディアスポラ」を使用する。

(2) ムリッドとは何か

ここで、研究対象とするムリッド、およびムリッドの国際移動に関する先行研究について簡単にふれておく。ムリッド共同体 (英: Murid Islamic Community, 仏: la Communauté Mouride) は、セネガル発祥のイスラーム共同体の一つで、その信徒もムリッド (Mouride) と呼ばれる。セネガルの人口1,455万人^{*7}の95%がムスリムと言われる。セネガルのイスラーム共同体の大半がスーフイズムの流れを汲んでいるという (刈谷, 2012)。ムリッド共同体は1883年頃に創設されたが、その後急激な成長を果たし、セネガルの政治経済に大きな影響を与えている。アフマド・バンバ (Ahmad Bamba) という一人のスーフィーの周りに形成された小集団から発展し、現在は400万人の信徒数を抱え (Babou, 2007)、国民総数の約3割を超え (小川, 2010)、教団関係者によると現在も信徒数は増加し続けているという。ムリッド共同体の成立はそもそもフランス植民地政府がバンバに従う人びとを恐れ、1895年にガボンへ流刑にしたことで人びとの信仰が高まり、1902年に流刑地から帰国したことが「奇蹟」と語られるようになったことが契機となっている。マラブー (Marabout: 宗教指導者) に対する聖者信仰、強固な教団組織と信徒の結束力、教団指導者の世襲制とマラブーの階層構造等を特色に持つ^{*8}。ムリッド信仰は、イスラーム教といってもいわゆる聖者信仰の傾向が強く、各信徒は信奉するマラブーのタリベ (Talibe: 信徒) という位置づけである。バンバまたは信奉するマラブーの肖像画を家に飾り、ペンダントとして身に付ける者も多い。同じマラブーを信奉するタリベが形成する組織はダイラ (Dahira) と呼ばれる。この他、ダイラは職場、学校、地域など重層的に組織されている。マラブーは人生のガ

イドである、と人びとは言う。マラブーは、聖地トゥーバ（Touba）のカリフ（Khalif：開祖バンバの後継者）を頂点とする階層構造を形成している。こうした正式なタリベ以外にも「自称」ムリッドが多く存在するようである。

バンバの帰還（1902年）以後、マラブー（宗教指導者）への絶対的な帰依と労働への強い価値づけが教えられるようになり、仏植民地政府は、ムリッド共同体を介し落花生生産をさせるようになり、ムリッド共同体とフランス植民地政府の相互協調関係が築かれた（小川、2010）。ムリッドは次第に農村部から都市に流出し、市場や運輸などのインフォーマル・セクターにも従事するようになり、都市移住と相互扶助のためダイラ（Dahira：信徒組織）を自然発生的に結成し結束を高めたという。地方ではダーラ（Daara）と呼ばれる農業共同体を基盤に落花生栽培を強化していったが、都市ではダーラの代わりにダイラを形成し、信徒同士で集まり、生活上の問題を助け合う場、教義を学ぶ場、祈りの場とした（小川、2010）。その後、パリ、ニューヨーク、ローマを中心に欧米へ移動、また商品の買付のためジェッダ、香港、台湾にも移動した（小川、1998）。

ムリッドの欧米への定住移動に関する研究^{*9}によると、旧宗主国フランスのマルセイユで布地生産販売をしたのが契機となり、1980年代には問屋・不動産業へと成長した。商品と共に欧州・アフリカ都市へと広がり、アメリカ・アジアへも拡大していったという。ムリッドの交易ネットワークは商品を介して同胞とともにビジネス相手を取り込んで構築されていった（Bava, 2003）。交易ネットワークは移動先各都市と聖地トゥーバ（Touba）とを結ぶ宗教ネットワークにリンクしているという（Bava, 2005）。

こうした先行研究と、アジアでの活動に関する筆者の調査から、筆者は、ムリッド共同体を宗教共同体であるとともに、新しいタイプの交易ディアスポラとして定義しようとしている。

(3) 「古典的」交易ディアスポラとの比較

本稿の対象となるムリッド共同体の「新しさ」を浮き彫りにするため、同じ西アフリカの交易ディアスポラの代表例であるソニンケ（Soninké）^{*10} 商人と比較しながら議論する。

ソニンケは西アフリカのマリ、セネガル国境地帯周辺に居住するエスニック・グループの名称である。ソニンケのディアスポラとしての特徴は離散と回帰の反復であり、歴史を通じて民族ネットワークを維持し経済活動の基盤となってきた。古代にはサハラ交易の大商人として名を馳せ、近年ではアジア・アフリカ貿易を切り開いた（三島、2011）。移動先社会で労働移民として認識されていたソニンケを交易ディアスポラとして再認識させた三島の業績は本研究の引き金となった。

ソニンケと言えばアフリカ商人の間では有名な存在である。1980年代にアジアの経済成長が移動要因となり、コンゴ^{*11} から香港に渡り、日本への入国・滞在が困難であったことから中継地としてバンコク、ジャカルタに滞在した。中東、アフリカ、フランスを経由しアジアへ向かったソニンケもいた。1990年代末にはバンコクに900人以上のソニンケ商人のコミュニティが存在、2000年以後、タイの移民取締まり強化と中国経済の発展により、アフリカ商人は香港に移動し始めた。ソニンケはさらに香港から広州へ移転し、1000人以上のコミュニティを形成した（三島、2011）。

ソニンケとムリッドの共通点としてイスラーム・ネットワークを交易に利用した点を挙げることができる。交易商人の中でどちらも少数派であることから、歴史に名高い「ムスリム商人」として、商習慣と信仰を共通文化に信頼関係を構築していった。「同じムスリムだから取引する」という言葉を筆者は何度も耳にした。

しかしながら、両者の決定的に異なる点が2点ある。1つは、ソニンケが古くから交易ディアスポラとして活躍し植民地時代には帝国の補助者として存在し続け、独立後に再び交易の世界に戻って来たという民族の歴史を持っている点である。ソニンケはロビン・コーエンが定義した交易ディアスポラ・モデルに適合する。一方のムリッドは植民地時代末期に誕生した新しい宗教集団である。2つ目は、ソニンケの移動の動機にある。「冒険（移動）は男性にとつての通過儀礼」という文化により、移動するのは男性中心である。一方、ムリッドはその歴史の新しさから女性の存在が比較的目立つ（詳細は後述する）。

以上の理由から、帝国の「補助者」として存続してきたという歴史も持たないセネガルの農民出身のムリッド商人は、ロビン・コーエンらの想定する交易ディアスポラに適合しない現代的事例と言える。そこで、筆者は、ソニンケを「古典的」交易ディアスポラ、ムリッドを「新興」の交易ディアスポラと再定義したい。

3 宗教ネットワークを連結するダイラの重要性

他のディアスポラ同様、ムリッド共同体は交易ディアスポラ化したことにより、移動先社会への「同化」というリスクを負うこととなった。そこで、境界性の維持のためダイラ（dahira）での活動が重要となってくる。本国でのダイラは地域共同体、職場や学校で組織される。ムリッド共同体には複数の宗教指導者の階層構造が存在しており、各指導者には追従する信徒コミュニティ（ダイラ）が存在する。こうして1人の信徒が複数のダイラに所属することで、ムリッドとしての自覚も高まる。移動先でのコミュニティでも、信徒数の多い都市ではケル・セリン・トゥーバ（Keur Serigne Touba）（ウォロフ語で「ムリッドの教祖の家」という意）と呼ばれるモスク兼宿泊施設を設置している。日常的な祈りから宗教行事までを行う場として活用されるほか、新規移民や宗教関係者が短期滞在用に利用している。

筆者はセネガルの聖地トゥーバ、セネガル農村の他、広州、ニューヨーク、埼玉県朝霞市でダイラの参与観察^{*12}を行った。農村では週に一度（木曜日深夜）、輪番制で自宅開催する。男女別に敷かれたゴザの上に着席し、一人が音響設備を用いてハサイド（khassaid：詠唱）を唱え全員で唱和する。片耳に手を当て、開祖バンバをはじめ聖人名を挙げ称える。詠唱の途中、カフェ・トゥーバ（Café Touba：スパイス・コーヒー）が提供される。信徒各自が100セーファーフラン程度の寄付（20円程度）をし、役員がそれを管理する。通常、22時頃から開始され、深夜1時過ぎまで続けられる。帰り道、仲間とともに月夜の村を歩く爽快感を筆者も体験し、信徒がダイラに参加する意味を少しであるが理解することができた。

広州のダイラ代表者の男性A（40代、貿易仲介業）は、単身で広州に長期滞在している。セネガル人経営の貿易会社（本社は首都ダカール）に所属し、アフリカからの買い付け商人を案内し、商品をコンテナに詰めて香港からダカールに向けて航送する手続などを請け負う。ビザ書換えのため毎年セネガルに帰国し、また広州に戻ってくる。Aによると広州ダイラのメンバーは約100名である。ダイラは、一般のマンションの一室で日曜夜に開催され、セネガルの村と同様に行われる。詠唱が終わるとセネガル伝統料理を共にし、少額の寄付をする。筆者が参加した日も30名ほどの参加者全員が男性であった。

欧米においてもムリッドのダイラに注目した先行研究がある。欧米ダイラのネットワークをマッピ

ングした研究 (Ross, 2011) の他、ニューヨークでのマリッドの経済的成功の原動力はダイラでの実践と教育により培われた信仰と連帯意識である (Babou, 2002)。フランス生まれの若者 (移民第二、第三世代) にマリッドとしての生き方を伝えるためダイラを宗教行事と信徒同士の交流の場になっている (Bava, 2003) など、いずれも移動先でのダイラ的重要性が指摘されている。

先行研究が指摘しているように、海外の移動先社会への適応には、出身村とエスニック・グループの違いを越えたマリッド共同体としての連帯が有効であるが、その一方で、世代を超えて変わらない交易ディアスポラとしての境界性保持も重要な課題であり、ダイラ活動は移動先での適応促進と境界性保持という相反する二つの側面において有効である。

特に、前者の「適応」の側面からみたダイラの機能としては、移動先での精神的サポートが挙げられる。一般には、移民が孤独やストレスを抱えないよう故郷の家族は精神的サポートもし続けると言われる。ペリカン (Pelican) は、ドバイにおけるカメルーン出身者の調査から、「出稼ぎ者と故郷の家族の関係はつい移民から故郷への送金に目が奪われがちであるが、家族の精神的サポートはそれ以上に重要であり両者は双方向的な関係である」と主張する (Pelican, 2009)。マリッドの場合、精神的サポートは故郷の家族に加え、移動先ダイラの仲間も担っている。セネガルの大家族の中で生育した移民一世にとって外国での孤独感は強烈で、ともに異国の地でビジネスを展開する同胞との関係は重要である。広州でもニューヨークでも、マリッドはダイラに欠席が続く仲間がいると自宅を訪問し困っていることがないか確認するという。欠席者は病気や金銭的なトラブルを抱えている場合が多く、仲間の支援により、異国での孤独感からも解放される。

4 交易ディアスポラとしての連帯をつくりだす場

(1) 中国貿易の拠点・広州の事例

前項では、マリッド共同体の境界性維持と連帯にとってダイラが重要であることを明らかにしてきた。しかし、移動先のダイラには女性の存在が見えてこない。広州の買付け商人と長期滞在者、女性マリッド、中国人が会合う場、インフォーマルな情報交換の場がどこかにあるはずである。アフリカ都市人類学の先行研究においても、滞日カメルーン人の中古車ビジネスの情報交換の場としてアフリカ・レストランが重要な役割を果たしていることが指摘されている (和崎, 2008)。

他と同様に広州においても、長期滞在型と短期滞在型のマリッドが存在する。長期滞在型の職種は貿易会社、エスニック・レストラン、ゲストハウス、買付け仲介、積荷搬入等である。長期滞在者には女性は少ない。少数の女性の仕事は単身男性と買付け商人にセネガル料理を提供 (看板のないレストラン、自宅でのデリバリー) することである。夫妻で長期滞在していても、子どもたちは教育上の理由からセネガルの家族が養育している。広州で中国人女性と婚姻しているマリッド男性は調査時点では1名である。合法的な滞在者は、1年ごとに本国に帰国しビザを再申請している。

広州でアフリカ商人が買付を行っている場所は、ダシャトウ周辺、広州駅西側および公園西路、天秀ビルの3箇所である (栗田, 2011)。このうち、筆者の調査地は、天秀ビルと小北駅周辺、すなわち「広州アフリカン・タウン」と呼ばれる場所である。天秀ビル (天秀大廈) は、地下鉄小北駅周辺にそびえる比較的古い高層ビルで、A・B・C棟の1～3Fが、アフリカ向け商品の問屋街である。商品は、服地、付け毛、電化製品、ムスリム用品、靴、鞆等、店員は中国人、アフリカ出身者、客はアフリカからの買付け商人で、電卓がコミュニケーション手段となっている。

広州での参与観察をすすめるうち、天秀ビル上層階にあり、筆者の逗留先 (参与観察のためマリッド・レストランに滞在) のS夫妻のもとに、毎日深夜になると長期滞在のセネガル人が集まっていることに気がついた。この情報交換会を本稿では「サロン」と呼ぶ。サロンは深夜2時頃まで続き、長期滞在者の輪に買付け商人も加わり、ビジネス情報からセネガルの政治に至るまで情報交換を行う。セネガルからの買付け商人が最新情勢を持ち込み、S夫妻が買付け情報を提供するもので、双方にとってメリットがある。天秀ビルの問屋街は午前中はシャッターがおりている。アフリカとの時差 (+8時間程度) に合わせて営業するうち、午後から夜にかけての営業が習慣化してしまったものではないかと予想される。したがって、早起きの必要がなく、深夜まで買付けした後に情報交換し、また翌日の買付け計画を立てるようである。筆者は、こういったインフォーマルなサロンが故郷と移動先のマリッドの連帯意識を高める場として機能していると考えている。尚、サロンはセネガルからの客をもてなす場であるので、客がいない場合、夫はダイラに出向くし、宗教行事には参加している。

ここで、S夫妻の移動史、生業、家族について紹介する。S (妻, 30代) は2006年頃バンコクから広州へ移動した。バンコクでもレストランを営み、夫 (40代) は貿易仲介をしていた。バンコクのアフリカ人コミュニティで中国製品の買付先として広州のことが知れ渡り、客が広州に向かうようになったため、まず夫が移動、1年後にSも移動し広州にレストランを開店した。レストランには看板はなく、携帯電話で注文が入ると中国人従業員がデリバリーをする。直接買いに来る同胞の顧客もいる。天秀ビルのエレベーター事情が悪いこともあり、ビル店舗で食事を済ませる店員が多いことから、デリバリーでもビジネスとして成立する。娘3人はセネガルの大家族の中で養育されている。Sは4人の中国人を雇用しており、日常のやりとりから広東語を覚えたという。夫妻はレストランとドミトリー (男部屋に5台、女部屋に3台のベッド) を経営している。宿泊客はセネガル人ばかりで、リピーターが多い。レストランとドミトリー経営はSが担当し、夫は宿泊客らの貿易仲介をするとともに、おおよそ2か月に1回のペースで自身も商品を故郷の家族に仕向けコンテナを出している。コンテナ到着時期に合わせ、夫妻は別々に滞在ビザの再申請のために帰国している。

筆者も調査期間中はSのドミトリーに宿泊している。筆者と同室のマリッド女性Oは、Sのバンコク時代からの顧客である。Sが広州に移動した後、Oも買付け先を広州に変更したため、広州でSを探したという。Oはセネガルで書類を揃えて商用ビザを申請している。多くの買付け商人は2週間のビザで来ているが、Oは1ヶ月の商用ビザで来訪し、商品 (家具と建築資材) の発注をした後、商品が揃うまでバンコクへ1週間ほど出向いて貴金属の買付けをする。Sから見せられた商品は銀製のアクセサリーだった。

天秀ビル以外に、セネガル人経営の貿易会社を訪問した。客としてそこにいた10人ほどの女性商人のグループの1人に話をきくと、2週間のビザで来訪しドバイでトランジットして買付けするという。後日、セネガルの首都ダカールの彼女の店舗を訪問すると、中国製の電化製品、インド製の食器、家具、寝具を扱うセレクトショップであった。彼女が買付けに出かけ、母親が店番をしているらしい。彼女から紹介された同業者もみな女性で、絨毯などの取引現場に同席して話を聞くと、中にはビジネス専門学校を出た若い女性も含まれており、義烏に買付けに行くため準備中ということであった。中国とセネガルでの調査で、女性商人の台頭がめざましいことを実感した。

セネガルからの買付商人が短期間で効率よく買付をするためには現地事情に詳しく広東語が理解できる仲介者の存在が不可欠である。S夫妻もマリッド男性2人に業務を委託している。彼らは長期滞在者で、夫妻とは別に住んでいるが、サロンには毎晩顔を見せていた。

日曜日にS夫妻がコンテナを出すというので、承諾を得て同行した。夫妻は運転手付きのレンタカーを借り、ムリッド男性2名とともに広州から車で隣接する佛山市へ向かった。到着した場所には、40フィート・コンテナが直接つけられる倉庫が見渡す限り続いていた。倉庫の責任者の若い中国男性と夫は英語で交渉をすすめた。倉庫には梱包された建築資材、電化製品が高く積まれている。S夫妻は事前に発注していた商品と別便で広州から送った商品を20フィートのドライ・コンテナ（中身を完全密封できる）に積み込んだ。Sは民族衣装のままコンテナによじ登ると、広東語で倉庫従業員に指示を出しながら積み込みは完了した。コンテナは陸路で香港に向かい、ダカールまで大型貨物船で約1か月半かけ搬送される。筆者は、2ヶ月後セネガルに向かい、同時期に帰国していたSと会い、Sの故郷での姿と商品の到着を確認した。夫妻の実家は首都ダカールから3時間ほどの距離にある地方都市の小売店である。

S夫妻のように、故郷の家族と交易によってつながっている例は他にもある。筆者がS夫妻に注目しているのは、広州におけるムリッドの交易ネットワークの重要な存在だとみたからである。夫妻のドミトリーを拠点に買い付けをするムリッド以外に、夫妻を通じて多くのビジネス・パートナーと出会い取引の輪を広げているセネガル商人がいる。単身で広州に渡り、貿易仲介している男性たちにとっては故郷の味を提供してもらえる場であるし、単身で海外に買い付けに向かう女性商人はSを頼ってドミトリーにやってくる。Sは広東語とデリバリーによって、運送業者、問屋などの中国社会ともネットワークを持つ。問屋で英語や仏語を話す中国人からも、Sのレストランでデリバリーを頼むことがあるという。

アフリカ商人に多い個人を単位とするビジネスの情報交換という意味では、インフォーマルなサロンの持つ意義は大きい。広州の事例から見えたように、インフォーマルなサロンがセネガルと中国の交易ネットワークの隙間を埋める役割を担っている。単身で貿易仲介する男性が多い中、夫妻がサロンを主宰し顧客を確保できるのは、3人の子どもたちを故郷に残し広州でビジネスに生きる妻Sの貢献が大きい。夫妻で営む店という信頼があるからこそ、故郷セネガルからも中国社会からも、男性商人も女性商人も、夫妻の顧客となっているのではなかろうか。

(2) 交易の中継地・ドバイの事例

中東のアラブ首長国連邦(UAE=United Arab Emirates)は、7首長国から構成される。中でもドバイの経済発展は目覚ましく、中東・中央アジア・アフリカ向け物流のハブ、中国・インド製品の保管倉庫としての機能を果たしている。中国のGCC諸国への輸出の第1位がUAEで、ドバイ経由で中国商品がアフリカに再輸出されている。多くの中国企業が「フリーゾーン」企業の地位を得て、中国製品の卸売りを行っている。ドバイは中東・アフリカ地域の物流拠点、ビジネス拠点になっており、衣類、カバンから機械類、製造ラインに至るまで多様な商品を扱っている(細井, 2011)。

ペリカンらの研究によると、カメルーン商人がドバイに移動した理由として、買付け目的以外に、移動の第二選択肢であることが指摘されている。移動の第一の目的地は欧米であるが、ビザの問題から達成できず、第二の目的地として南アフリカ、中東、中国を選択しているというのである。ドバイでの主な職種は、アフリカからの買付商人との仲介、購入先や宿泊の手配、ビザの代行、商品の輸送、プライベート・タクシー、自宅での食事・酒の提供等がある(Pelican, 2009)。

ドバイの中心は運河(クリーク)を挟んで北側のデイラ地区と南側のパールドバイ地区に分けられる。筆者は、2013年1月及び8月にドバイ首長国のデイラ(Deira)地区にてムリッドの調査を行った。

地下鉄バニアス・スクエア(Banias Square)駅からパーム・デイラ(Palm Deira)駅の間にあるインド・パキスタン系地区にアフリカ商人が集まる。その一角、両替屋と電気製品の店が立ち並ぶ通り沿いにあるビジネスホテル内にムリッド・レストランがある。広州のS夫妻と同様に、ここでも男女の役割分担がみられる。経営者女性の夫はアフリカ全体からの買い付け商人の貿易仲介をし、料理は妻と妹が担当している。一家は2007年にダカールからドバイに移動し、レストランを開いた。レストランにはドバイ長期滞在セネガル人の他に買い付け商人などが集まる。夫はここで携帯電話を利用した商談をしている。ドバイでセネガルの交易関係者が出会う場はこのレストランである。アフリカからの買い付け商人はこのホテルまたは周辺の安ホテルを利用する。

中国商品を広州で買付ける以外にも、多くのアフリカ商人は中国あるいはインド・パキスタン商品をドバイで買い付けている。この他にも、中東産の香水、農産物も取引される。広州で出会った女性商人たちからもドバイの商品の多様性が指摘されていた通り、問屋街で扱われる商品は、中国製電化製品のほか、ムスリム向けの礼拝用品、インド系の繊維製品も目立ち、筆者もセネガルの市場でよく見かける商品をドバイで確認した。

ドバイのダイラ代表者によると、ドバイ首長国に長期滞在するセネガル出身者は200～300人、長期滞在者のうち正式にダイラに登録しているのは男性25人である。ドバイのムリッド・コミュニティの規模はまだ小さいが、毎週金曜夜にダイラを開催している。長期滞在者の多くが男性で、女性はエミレーツ航空で勤務するキャビン・アテンダント以外は少数である。その少数の女性は料理のデリバリーで生計を立てている。レストランとして営業しているのはここだけで、商業地区にあるため単身男性は常連客となる。ダイラの規模が小さく、同胞を援助する余裕がないとのことである。代表者自身はドバイに留学し、卒業後に会社を立ち上げ、セネガルの実家(首都ダカール・サンダガ市場の間屋)と交易をしている。彼の妻子はドバイで同居している。イスラーム圏への留学を契機とする起業例は、今後のモデルケースになるであろう。

(3) 交易ネットワークの仲介機能

広州およびドバイの事例からは、ムリッド・レストランが移動先社会(長期滞在ムリッド、セネガルなどアフリカ出身者、現地のビジネス相手)と出身社会(短期買い付け、家族)を交易ネットワークによってつなぐ仲介の場を提供していることが明らかになった。レストランは本来の目的であるところの、家族と離れて移動先で孤独な人びとにソウルフードを提供し同胞との語らいによって精神的安定を与える機能を果たしているのみならず、仲介業を通じて交易ネットワークをつなぐノード(結節点)ともなっている。

さらに、男女の役割分担をみると、移動先社会および他のアフリカ・コミュニティとの接合に貢献しているのがレストラン経営者(女性)である。広州とドバイの事例から、交易ネットワークを結束するノードとなりビジネスを発展させやすいのは、エスニック・レストラン経営者(女性)と貿易仲介者(男性)が家族または夫妻のケースである。広州のS夫妻のレストランは自宅にドミトリーを備え、毎晩のようにサロンを開催して長期滞在者(男性)と買い付け商人(男・女)の交流を促進している。ドバイのレストランの事例では、食事提供(女性)の場と同時に、インフォーマルな取引およびビジネスのコーディネートをしている夫(男性)の事務所でもあり、買付商人(男・女)の情報収集の場、長期滞在者(男性)の社交の場としての機能を果たしている。これらの事例から、男女の協働と役割分担が重要であるとともに、仲介者の存在が交易ネットワークを連結するノードであることを示

唆している。

5 むすびにかえて

本稿でとりあげたマリッド共同体は、セネガルがフランスから独立した後に急激に台頭してきた「新興」の交易ディアスポラである。ソニンケのような「古典的」交易ディアスポラは交易商人としての歴史があるが、マリッド共同体は19世紀以降に現れ、農民から首都ダカールに出てインフォーマルな市場商人・運送業などを経由し、旧宗主国フランスをはじめとする海外へ新天地を求めて移動し、今日、交易ディアスポラとして再定義されるべき存在となった。

マリッド・コミュニティはトランスナショナルな世界に分散していながら、信仰を倫理的凝集力として結束している。その結束を維持するため、宗教ネットワークのノードに位置づけられるダイラ（男性中心）は、信仰実践による連帯意識を高めてディアスポラの境界性を維持する機能（強固な組織）を果たしている。交易ネットワークのノードとして、移動先社会、他コミュニティとの連結に貢献しているのがエスニック・レストラン（女性中心）である。交易ネットワークはビジネス相手・移動先文化の多様性に適応しながら組織を拡大する柔軟性を持つ。

広州とドバイの事例からは、2つのネットワークにおける男女の役割と、性質の異なる2つのネットワークを連結する仲介者（事例では夫妻）の存在が読み取れた。今後、アフリカ－アジア間交易の拡大に呼応して、アジアの国際都市におけるマリッド・コミュニティも拡大することが予測され、ますます仲介者の役割が重要になってくる。

宗教共同体においては、宗教指導者－信徒関係（男性）が中心であるが、ビジネスの現場では男・女ともにそれぞれ役割を担っている。マリッド共同体の場合、宗教ネットワークと交易ネットワークという性質の異なるネットワークを男女の協働によってうまく連結していることが交易ディアスポラとしての強みである、と筆者は考える。今後は、特に女性仲介者と若手女性商人に注目してマリッド・コミュニティの動向を調査していきたい。

最後に、残された研究課題を挙げておく。コーエンは特定の宗教と交易における成功との関連性については触れていないことも自ら語っている（Cohen, R., 2008=2012）。筆者はマリッドの信仰と交易との間に親和性があると考えているが、マリッドの教義・価値観が交易などの経済活動とどう関係しているのかは解明できていない。この問を今後の研究課題としたい。

- *1 広州（Guangzhou）での調査は2012年9月及び2013年4月、マリッドが経営するレストラン兼ドミトリーに逗留しながら実施した。マリッド11名、ソニンケ2名、中国人ビジネス相手4名にインタビューを行った。その他に店舗の参与観察など質的調査を実施した。ドバイ（Dubai）での調査は2013年1月、2013年8月に、マリッド3名、アフリカ出身者3名にインタビューを実施した。さらに、広州における調査対象者の故郷での活動と家族とのつながりを調査するため、広州でインタビューした4名のセネガルの店舗と家族訪問を2012年12月、2013年2月、2013年6月～7月に実施した。調査費の一部は同志社大学から助成を受けている。
- *2 現在回族と分類されている人びとの母語は漢語で、回族とはイスラーム教を信仰することで漢族と区別される。回族は全国に散らばり、多くが漢族など多民族と隣接して居住しているのも特徴的である（松本、2010）。
- *3 ル・モンド・ディプロマティーク日本語電子版、2010.5「広東のアフリカ商人たち」による（<http://www.diplo.jp/articles10/1005.htm>, 2015年7月20日アクセス）。

- *4 中国・アフリカ協力フォーラム（FOCAC）は2000年から3年毎に開催されている。
- *5 人民網：2014年8月29日＝Record China 2014年9月1日（<http://www.recordchina.co.jp/a93497.html>, 2015年12月7日アクセス）
- *6 広州・義烏のアフリカ人コミュニティおよび中国のアフリカ貿易に関する研究ではBodomo（2010）、Bredeloup（2012）、Cisse（2013）等がある。
- *7 World Bank の2014年の統計による。
- *8 先行研究として、O'brien（1970）、Copans（1980）、Coulon（1981）、Babou（2007）がある。
- *9 フランスのマリッドに関してはBava（2003）、イタリアのマリッドに関してはRiccio（2006）、アメリカのマリッドに関してはBabou（2002）が詳しい。
- *10 ソニンケは8～12世紀頃に西アフリカ最初の王国とされるガーナ王国（現在のモーリタニアに首都があったとされる）の支配者として知られ、サハラの北の交易路を抑え南との中継貿易によって繁栄していた。ガーナ王国の滅亡後はしばらく歴史的な記述が存在しないが、フランス植民地時代には、戦士身分のソニンケはフランス軍兵士としてアフリカ各地へ侵攻する者、フランス商社の出入り商人となる者、大型船に乗って世界中を航海しながらマルセイユ・ボルドーなどの寄港地に滞在する者も現れ、交易商人の時代のような移動先での拠点形成を始めた。資金を貯めた者は同胞に宿泊・食事・便宜供与をするようになり、大戦後はフランスの工業都市での需要に応じて工場労働者となっていった（三島、2011）。
- *11 三島によると、ソニンケは植民地時代、仏領アフリカ経済の中心となっていたコンゴに既に多く移動していた（三島、2011）。
- *12 ダイラに参加するにあたり、筆者が代表Aの許可を得た上で、S夫妻の指示でマリッド男性に付き添われて当該マンションに出向いた。お互いに顔見知りであるため、Aから紹介された筆者は広州のマリッド・コミュニティで認知された。ニューヨークのダイラの場合はハーレムの一角にアメリカ在住のマリッドによって建設されたモスクがあり、週1回ダイラが開催されている。日本では、埼玉県朝霞市でコミュニティセンターの一室を借りて月に一度程度、開催されている。内容は本国と同様であるが移動先の場合は参加者が男性である。マリッドからの聞き取り内容を総合すると、パリ、ドバイ、バンコク、クアラルンプールにもダイラは存在しており、月に一度程度開催されているということである。マリッドによるインターネット上の発信からはさらに多くのダイラの存在が読み取れる。

《参考文献》

邦語

- ・小川 了、1998『可能性としての国家誌——現代アフリカ国家の人と宗教』世界思想社
- ・小川 了、2010「第5章 セネガル独自のイスラーム教団——マリディーヤ（マリッド教団）の創設とその後の発展」「第6章 マリッド教団とインフォーマル・セクター——セネガル経済を支える隠然たる力をもつ人びととイスラーム教団の関係」小川 了編著『セネガルとカーボベルデを知るための60章』明石書店、34～42頁
- ・荻谷康太、2012『イスラームの宗教的・知的連関網——アラビア語著作から読み解く西アフリカ』東京大学出版会
- ・栗田和明、2011『アジアで出会ったアフリカ人——タンザニア人交易人の移動とコミュニティ』昭和堂
- ・細井 長、2011「中国と湾岸諸国の経済関係」財団法人中東調査会編『中東研究』512号、92～103頁
- ・松本ますみ、2010『イスラームを知る 7 イスラームへの回帰——中国のムスリマたち』山川出版社
- ・三島禎子、2011「民族の離散と回帰——ソニンケ商人の移動の歴史と現在」駒井 洋監修・編著、小倉充夫編著『ブラック・ディアスポラ』明石書店、105～130頁
- ・和崎春日・田淵六郎・田中重好、2008「来住アフリカ人の集合状況と中古車ビジネス——滞日カメルーン人のアフリカン・レストランへの集合と情報交換」『平成16-18年科学研究費補助金研究報告書・来住アフリカ人の相互扶助と日本人との共生に関する都市人類学的研究』145～157頁
- ・ジェトロ（日本貿易振興機構）海外調査部中東アフリカ課、2013.3「共同発展を掲げ経済協力を推進（中国）」『主要国の対アフリカ戦略（世界・アフリカ）』22～28頁（<https://www.jetro.go.jp/world/reports/2013/07001243.html>, 2015年12月7日アクセス）

欧文

- ・Babou, C., A., 2002, Brotherhood, Solidarity, Education and Migration: The Role of the Dahiras among the

- Murid Muslims Community of New York, *African Affairs* 101, pp.151-170.
- Babou, C. A., 2007, *Fighting the Greater Jihad: Amadu Bamba and the Founding of the Muridiyya of Senegal, 1953-1913*, Ohio University Press.
 - Bava, S., 2003, Les Cheikhs Mourides Itinerants et l'Espace de la Ziyara a Marseille, Laval, *Anthropologie et Sociétés* 27 (1), pp.149-166.
 - Bava, S., 2005, Variations Autour de Trois Sites Mourides dans la Migration, *Autrepart* 36, pp.105-122.
 - Bodomo, A., 2010, The African Trading Community in Guangzhou : An Emerging Bridge for Africa-China Relations, *The China Quarterly* 203, pp.693-707.
 - Bredeloup, S., 2012, African Trading Post in Guangzhou: Emergent or Recurrent Commercial Form, *African Diaspora* 5, pp.27-50.
 - Brubaker, R., 2005, The 'Diaspora' Diaspora, *Ethnic and Racial Studies* 28 (1), pp.1-19 (= 2009 「ディアスポラのディアスポラ」『ディアスポラから世界を読む——離散を架橋するために』白杵 陽監修, 明石書店, 375 ～ 400 頁)
 - Cisse, D., 2013, South-south Migration and Sino-African Small Traders : A Comparative Study of Chinese in Senegal and Africans in China, *African Review of Economics and Finance* 5 (1), pp.17-30.
 - Cohen, A., 1971, Cultural Strategies in the Organization of Trading Diasporas, Claude Meillassoux (ed.), *The Development of Indigenous Trade and Markets in West Africa*, Oxford: Oxford University Press, pp.266-281.
 - Cohen, R., 1997, *Global Diasporas: An Introduction*, UCL Press (= 2001 『グローバル・ディアスポラ』角谷多佳子訳, 駒井 洋監訳, 明石書店)
 - Cohen, R., 2008, Trade and Business Diasporas : Chinese and Lebanese, *Grobal Diaspora: An Introduction 2ed.*, Routledg, pp.83-100 (= 2012 「交易ディアスポラ」『新版グローバル・ディアスポラ』駒井 洋訳, 明石書店, 173 ～ 206 頁)
 - Copans, J., 1980, *Les marabout de l'arachide : la confrérie mouride et les paysans du Sénégal*, Paris: L' Harmattan
 - Coulons, C., 1981, *Le marabouts et le prince-islam et pouvoir du Senegal*, Paris, Pedon
 - Coulons, C., 1999, The Grand Magal in Touba: A Religious Festival of the Mouride Brotherhood of Senegal, *African Affairs* 98 (391), pp.195-210.
 - Curtin, P., 1984, *Cross-Cultural Trade in World History*, Cambridge University press (= 2002 『異文化間交易の世界史』田村愛理・中堂幸政・山影 進訳, NTT出版)
 - O'brien, C. B., 1970, Le talibé mouride: La soumission dans une confrérie religieuse sénégalaise, *Cahiers d'Étude Africaines* 10, pp.562-578.
 - Pelican, M. and Tatah, P., 2009, Migration to the Gulf States and China: Local Perspectives from Cameroon, *African Diaspora* 2, pp.229-244
 - Riccio, B., 2006, «Transmigrants» mais pas « nomades» : Transnationalisme mouride en Italie, *Cahiers d'Études Africaines* 181, pp.95-114.
 - Ross, E., 2011, Globalizing Touba: Expatriate Disciples in the World City Network, *Urban Studies* 48 (14), pp.2929-2952.

A New Diaspora from Africa Trading with Asia:

Case Study of Senegalese Mourides Merchants Trading in Guangzhou and Dubai

ENAMI Yukari

Doshisha University

Key Words: trading diaspora, Mouride, trading intermediary

A considerable time has passed since China was first referred to as “the world’s factory”.

After 2000, people from all over the world gathered in Guangzhou in order to acquire Chinese products. One unanswered question is why did so many African merchants travel to China in order to buy goods directly.

There exists trading diasporas from Africa who have served as the trading intermediaries between Africa and China. From the distant past, the *Soninke* people have played an active part in trade in the Sahara Desert region. The author thinks that they are a “classic” example of trading diasporas. In contrast, the Mouride brotherhood is an Islamic community founded by *Ahmad Bamba* in the late 19th century. The Mouride brotherhood is establishing communities in the world’s major cities and is actively enlarging its trade network at the present time.

The author maintains that the Mouride brotherhood is a new trading diaspora. They have formed *dahiras* (believer associations) in the places where they have established themselves to support their daily religious observances and as a means of providing mutual aid. Through the practice of their faith in the host society, the Mouride gain a sense of solidarity. Being somewhat isolated within the host society, the Mouride people gain psychological stability through interchanges with their fellow adherents at meetings of the *dahiras*. They are not only building trade networks linking Africa and Asia, it has also been revealed that female merchants play important roles in the host society as the trading intermediaries in business activities.